歴史絵巻

巨椋池（おぐらいけ）

[redacted]

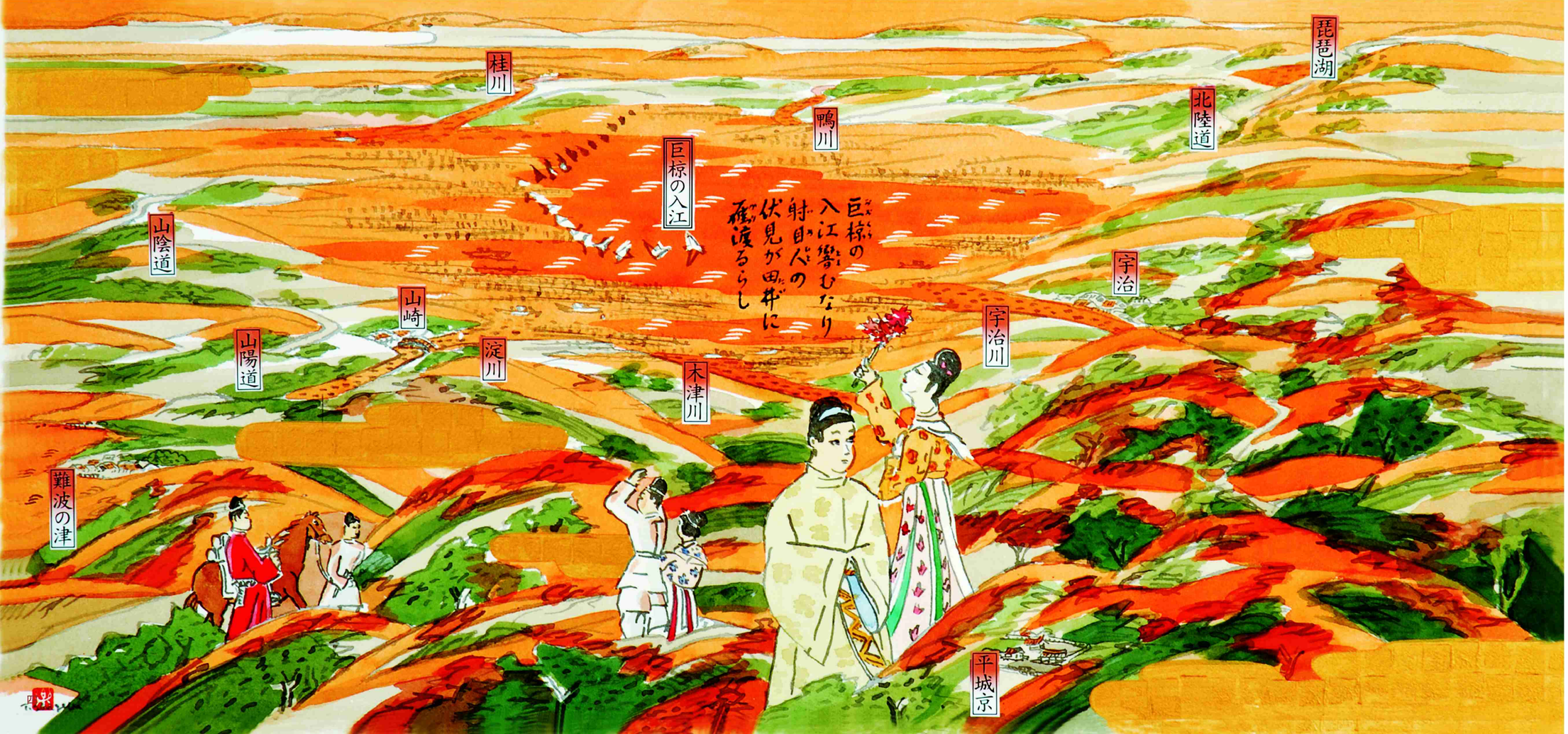
山城の首長（しゅちょう）拓（ひら）けゆく入江を見渡す

いま巨椋池（おぐらいけ）干拓地に、考古学の世界からも熱い視線が注がれています。

第2京阪国道の開通工事に先立つ発掘調査によって、久御山町の市田斎当坊（いちださいとうぼう）遺跡など旧巨椋池南岸に大規模な遺跡が確認されています。弥生時代から巨椋池の水際で人々が村をつくり、稲作を営んでいたことが明らかになってきました。

この時代には、すでに水の流れがいく筋にも分かれていました。そのため、水害はあるものの、その周辺は比較的落ち着いた水深が保たれていて、安定した生産と生活が営まれる条件にあったと考えられています。

水垂（みずたれ）、木津川河床（きづがわかしょう）と水辺の遺跡群も次々にあらたな情報を提供しています。古代の巨椋池とそれを取り巻くイメージは、しだ



奈良時代

帝都の槌音（つちおと）水に陸に人が行き交う

淀川を遡上して、山城、近江そして大和に分岐するこの平坦な地域の各所に、古代文化の華が開きました。

万葉の古歌に詠われた「巨椋の入江」という言葉からは、平常時には水深が浅く、おだやかな水面が広がる大きな池の姿が思い浮かびます。

巨椋池に隣接する宇治は「ウチ」という意味を持っており、平城京（奈良）のウチ、すなわちその勢力のおよぶところとされていました。そのため、急流が険しい渓谷をぬけた宇治の谷口には早くも大化二年（六四六）、その渡河点に橋が架けられました。

この時代、大和から北国・東国へと通じる古道は、まず北へ山を越えて宇治・山科を経て近江に抜けました。旅人の目には、宇治川東畔の小高い丘などからは西方への眺めがきいたことでしょう。広々とゆったりとした巨椋池のかなたに向日（むこう）丘陵や山崎が見渡せたにちがいありません。

遊宴と物語 水辺の音と風光に誘われる王朝人

平城京から長岡京、そして平安京へ都が移るなかで、巨椋池は新しい都と古い都の中間に位置することになりました。政治や文化の中心にあった貴族たちは、巨椋池の水辺を別業（別荘）を営む保養地として注目しました。

こうして網代木（あじろぎ）、川霧、柴舟（しばふね）、そして川風など、宇治の風物詩が生まれたのです。そんな風雅の地の名声をさらに上げたのが『源氏物語』宇治十帖でした。光源氏を中心にくりひろげられる華やかな本編に対して、「橋姫」以下の十帖では宇治を舞台として静かで趣深い物語が展開されます。

藤原文化の粋を集めた平等院と、現存最古の神社建築である宇治上神社が向かい合う宇治川のほとりには、いつしか宇治十帖の古跡が定められました。巨椋池の東端は王朝文化の名残を色濃くとどめています。

洛南の水戦に揺れる

中世は武士の時代といわれます。源平合戦を記した『平家物語』を頂点とする一連の軍記物は、「武者の世」の戦いをあざやかにいきいきと描きます。

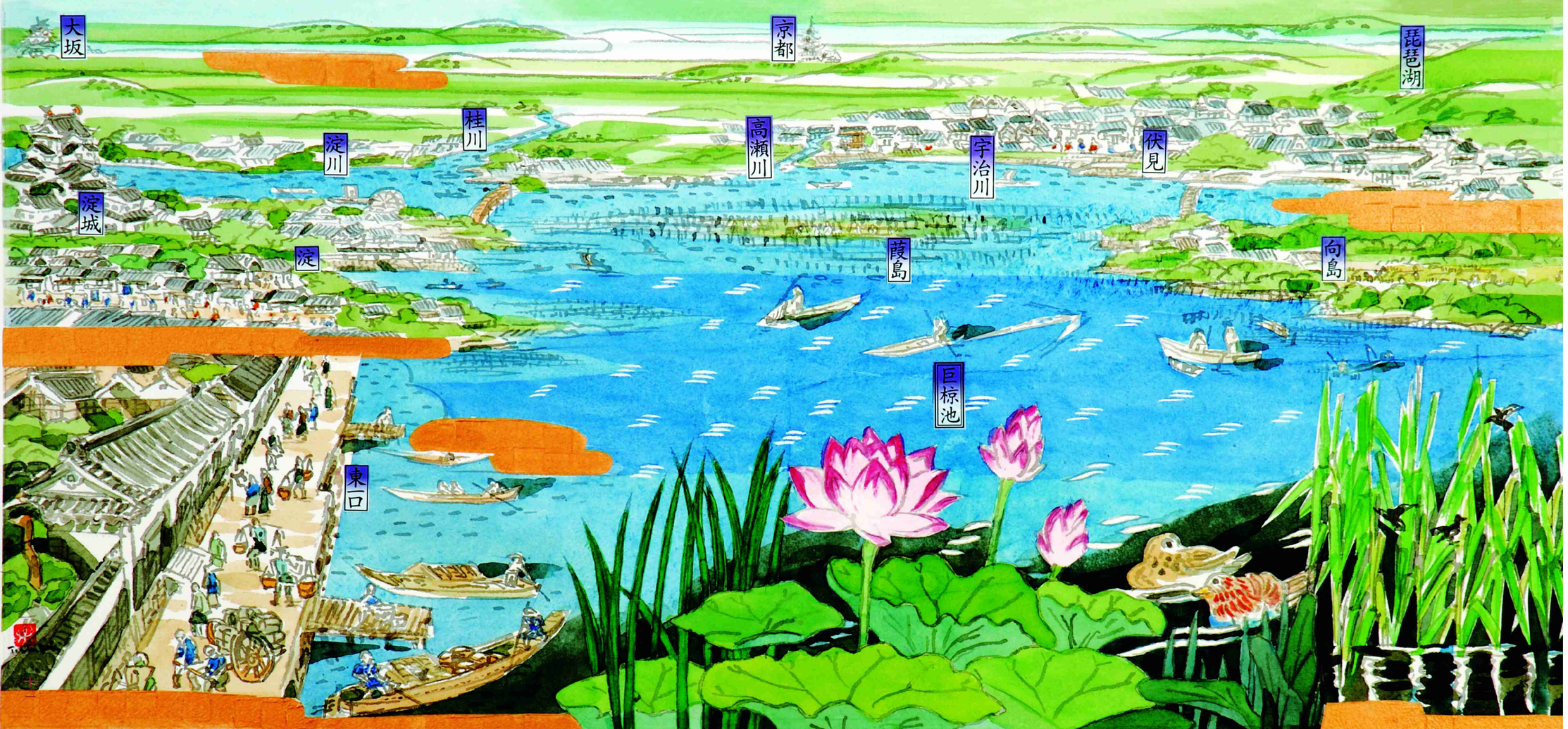
以仁王、源頼政らが平家打倒のため挙兵した際の宇治橋合戦、平家を都から追い落とした源義仲を攻撃する源義経軍による宇治川先陣争い、承久の乱における再度の橋合戦は世に広く知られています。南北朝期の動乱や応仁・文明の乱、戦国の乱世には、淀そして一口（いもあらい）、山崎へも戦禍はおよびます。槇島城、淀城、御牧城など巨椋池周辺は群雄割拠の様相を呈し、宇治川、木津川、桂川、巨椋池がつらなる水陸交通の要衝（「衝地（くち）」）は、しばしば合戦の舞台となりました。

黄金の輝き 水面（みなも）に映える

豊臣秀吉が天下統一をなしとげた時代を、政治的な拠点をおいた地にちなんで桃山時代とよんでいます。秀吉は、巨椋池を見下ろす伏見の景勝の地に城と城下町を築き、政権の中枢とそれを支える都市機能の充実をはかります。宇治川も今のようなひとつの流れにまとめられ、両岸の堤防も整備されます。世にいう太閤堤です。

秀吉の没後、伏見城には徳川家康が入りますが、関ヶ原戦の前哨戦で西軍の攻撃を受け落城します。翌年から再建され、江戸幕府による畿内・西国支配の象徴的な施設となりますが、元和九年（一六二三）家光の将軍拝任の儀を最後に廃城となります。

しかし、伏見城下は京都そして西国をつなぐ要衝、また淀川舟運の拠点として重要な役割を果たします。



江戸時代

豊かな稔とあふれる水辺 花はさくら木

巨椋池は大池と呼ばれていました。大池は、浅い淡水池であったために、数多くの魚が棲息し、また美しい蓮や人びとの暮らしに有用な水辺の植物が繁茂するところとなっていました。江戸時代の中ごろ、田沼意次の時代を描いた小説『花はさくら木』(辻原登)では、このような巨椋池が物語の魅力的な、そして生活感のあふれる舞台となっています。

大坂と京都・江戸を結ぶ街道の結節点にあった大池は、経済・文化の発展にも影響を与えたことでしょう。大池周辺の村々もその恩恵にあずかりますが、反面、水害の危険と常に背中合わせにあり、大池周辺の村々は迫り来る水害とたたかい続けます。

現代

いにしえの時空をこえて 今 伝えたいことがあります

山城国古図

南北に連なる京都・山城盆地三万ヘクタールの真ん中には、大きな窪（くぼ）みがあります。そこは地形的に最低部にあたるため淀川水系の宇治川、桂川、木津川の三大河川が合流し、かつては盆地全体の六分の一の五千ヘクタールに及ぶ大きな水域にまで、広がりをみせたことがありました。それは古来、巨椋の入江、大池、巨椋池などと呼ばれていました。

今も昔も交通の要衝にある巨椋池

また千二百余年の歴史を有する古都・京都の南に広がる巨椋池は、古くから飛鳥・奈良・京都・大坂を繋ぐ交通の要衝であり、人、モノ、情報の交流するところとして日本の歴史の重要な舞台となっていました。

巨椋池は、長い歴史の中で常に大河川の流れを受けとめ、大量の土砂を積み重ねてきたことで、時代とともにその広がりや形状が大きく変化してきました。

干拓直前の巨椋池（昭和7年）

吉田初三郎が描く干拓直後の巨椋池

久御山ジャンクションと巨椋池干拓地

向島ニュータウンを臨む干拓地に自生する蓮の花

近代に入り、欧米式の河川改修や七十年前の干拓によって大きな池から農地へと、巨椋池はすっかり様変わりしましたが、現在も歴史的に変わらない役割を担っています。

大都市・京都の近郊にある広大で自然豊かな巨椋池干拓地は、食や文化の面で人びとの生活と深く関わって営みをつづけています。これからも、我々の生命と文化を育んでくれる豊かな空間でありつづけることでしょう。

「巨椋池歴史絵巻」を通して、わたしたちの国土の役割とその大切さをあらためて感じとっていただければ幸いです。